

短 報

ブータンの装身具より見た地域的特性

向 後 紀代美

1. はじめに

1983年の3月から4月にかけての12日間、ブータンを訪れて装身具の調査を行なった。この国は外国人の入国を極端に制限しており一般には団体観光客の一員として、限定された地域を数日間のみまわることしか許可されていない。そんな状況の中で個人で滞在延長し、王族おかけの銀細工師の村を調査するチャンスを与えられたのは幸運であった。しかし、1日の滞在費が非常に高価なため、長期の調査日数がとれなかった。そんなわけで必ずしも充分とはいえないが、この種の記録がほとんど皆無な現在、ささやかな調査でも意義があると考え、ここに報告する次第である。

2. 概 況

ブータンは、日本ではあまり知られていない国なので本題に入る前にまずこの国の概略を記しておく。ブータンは、グレートヒマラヤ山脈の東南に位置する国で、国土の大部分は山岳地である。面積は九州よりやや大きい位(約47,000km²)、人口は123万人ほどである。——正確な人口統計はない。南のインドとの境は世界一の降雨量のある照葉樹の大密林、北のチベットとの境は氷河のヒマラヤ山脈という天然の要塞に囲まれている。国内の交通も不便で、ブータン人が首府のティンブーから東南部に行くのに、いったんインド領アッサム地方に出て、再度入国するのが一般的だという話も聞いた。人々の多く住むのは中央部を北から南に流れる河川添いに開けた広い谷である。ここには、首府のティンブーをはじめ、パロ、プナカ、トンサ、ブムタンなどの主要な町がある。これらの町は大体高度1,500mから3,000mほどの温帯地帯にあり、米を中心に、大麦、小麦、ソバ、トウモロコシなどを栽培する農業地帯の中心地でもあ

る。これに対し北部の山地ではヤクを飼育する牧畜地帯となる。

ブータン人は、自分たちのことを「ドルック・パ」すなわち「竜の民」と呼んでいる。中西部には、古くから移住してきたチベット系の子孫が、東部にはブータンの原住民の子孫が、そして南部には、19世紀頃から移住してきたといわれるネパール系の人々が主として住んでいる。

公用語は、ゾンカ(ゾンとは城、カとはことばという意味)といわれるチベット系の言語で、その他、東部ではシャーチョップカ、南部ではネパール語が話されている。

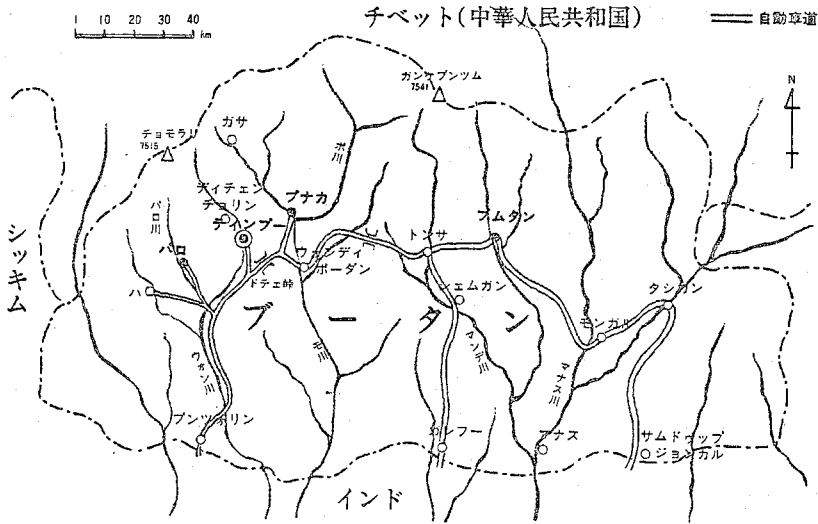
この国が統一されたのは、1907年、トンサの郡長であったウゲン・ウオンチュックによってであった。現国王ジグミ・シンギ・ウオンチュックはその四代目である。

宗教は、8世紀頃、パドマサンバウア(尊称グル・リンポチュ)がインドのナーランダからやって来て広めたといわれる仏教である。17世紀はじめ、チベットからやってきた僧ジャブドウン・ナワン・ナムギャルは西ブータンの主要な谷にゾン(城と僧院が共存している建築)を造り、宗教界と政界の二大長老並列の政治を打ち立てた。

現在も国王もとの国会(ツオンドゥー)に少数のラマ僧代表が入っており、人々の生活に仏教は密接な関係を持っている。どこの家にも立派な仏壇がある。赤ん坊に命名する時、また病気になったとき、相談に行くのは僧侶(ラマ)の所である。緑の谷に美しくそびえるゾンは日本の城のように単なる観光名所ではない。現在も地方政庁がおかれ、大勢の僧が起居する寺院として生きている。

筆者の問題意識の所在は、以上述べたような自然条件、人文条件がブータンの装身具にどのような影響を与えているのかという点と、もうひとつ周辺地域(ネパール、チベット、インドなど)の

図1 ブータン概略図



装身具との関連、比較にあった。特にネパールの場合は、その中のネワール族の金銀細工職人(サキヤ)がブータンの王室付の職人になっているという筆者のダーズリンでの聞き取りと、ネパール人職人の村があるという Mehra の記録により、特に興味を持っていた。

3. ブータンの典型的な装身具

ブータンは、日常、首府のティンプーや旧都パロでさえ人影をあまり見ない。幸いにも筆者の滞在中、5日間続いたパロのツェチュという祭礼で、一時に何万人という女性の“ハレ”の姿を観察し、そのうちの何人からか聞き取りをすることができた。村での“ケ(日常)”の状態と合わせて整理してみたブータン人の代表的な装身具は次のようなものである。

(1) コマ(ブローチ)

ブータン女性が身体に巻くキラという布を肩の部分でとめる円盤形のブローチ。両肩、つまり2つでセットとなる。2つのコマはジャプタと呼ばれる銀製の鎖でつながれていることが多い。コマの素材は銀もしくは銀に一部金メッキをほどこしたものである。タシ・タゲ(八つの吉兆模様)という宗教的な模様や竜など精巧な文様が彫られ、中心には、小粒のトルコ石がはめられることも多い。

少し前までは(いつ頃かについては人によって意見が異なり、はっきりしないが大体100年から50年前位のことらしい)ティンガップという大きなピンでとめていたという。コマも昔は大型だったと聞いた。

(2) ケコ(首飾り)

サンゴとズィー(ラサではスィーと呼ばれる)を連ねたもの。これ以外の種類はあまり見ない。ズィーは、チベット人がつけている独得の石で、黒褐色のメノウ質の石に白で目をあらわすいう文様を入れたものである。(これについては後に詳しく述べる)

サンゴは大粒で、薄い橙色が多い、ネパールやインドで珍重される血赤サンゴはほとんど見られなかった。トルコ石やコハクがないのもネパールやラダックとちがう点である。ちなみに、サンゴはイタリア産で、桃色は1トラ(11,664グラム)で500ニュートラム(ルピー)、(ブータンの通貨のレートはインドと同じで、インドのルピー札がそのまま通じる。1ニュートラムは当時約25円)。血赤が少し高く、600ニュートラムであった。

トルコ石はイラン産がよいとされ、ボンベイ経由で入ってくるという。中国産もみられた。チベット産のも若干みられたが、質は悪い、とブータ人に教えられた。

(3) シンチュー(耳飾り)

小さなトルコ石をはめた金または銀製のものが多い。デザインは、大型で多様なネパールのものと較べると、シンプルで、小型である。むろん、耳に穴をあけてつけるピアスである。

(4) ズッキー (指輪)

なぜか中指と薬指につけている人を多く見た。ネパールのネワール族の一部に見られるようにつける指にもきまりがあるといった例や欧米や日本のように左手の薬指にするのは婚約及び結婚をあらわすということがあるので、聞いてみたが特別な意味はないようだ。

素材は金が多く、小さなトルコ石がはめられていることもある。あまり目立たないデザインが特徴である。

(5) ドプチュー (腕輪)

コマや耳飾り、指輪に比べて、日常、腕輪をつけている人は少ない。素材は、銀(もしくはそれに金メッキしたもの)真鍮やパンチラトナが多かった。パンチラトナは5種類の金属をねじり合わせたもので、ネパールではインド系、チベット系とも男性がよくつけていた腕輪である。ブータンでは、男性はほとんど装身具をつけないが、なぜネパールでは男性用で、ブータンでは女性用なのだろうか。

祭礼などでおしゃれをするときは、銀製で彫刻をほどこした太目の腕輪をつける。

これらの装身具は祭りの日だけでなく、首飾りなどを小ぶりにして、日常田畑や台所で働くときもつけられていた。そして母系制のブータンでは土地や家財と共に装身具も母から娘へと相続される。

4. チベットとの類似と相違

ブータンにおける装身具の特色を次にまとめてみる。まず全般的には、素材が銀、サンゴ、ズィー、トルコ石、メノウなど文様に仏教の影響が見られる。技法は打ち出し(彫金)が中心など、チベットとの共通点が多い。しかし、チベットと異なるのは、男性がほとんど装身具をつけないことである。たまに首にズィーやメノウ、サンゴなど

の石を糸につるしてチョーカーのようにつけている子供や老人を見たが、ゴ(男性が着るドテラのような上着)の中にしており、写真を撮ろうとしたら、さっと衿を合せて見えなくしてしまったことから推定して、装身具というよりむしろお守りといった要素が強いのではないかと思われる。なおこのお守り(?)は、入浴する時はずさない。

先に述べた素材のサンゴとトルコ石についてさらにくわしく眺めてみよう。チベットとブータンでは共に両方の石を用いるが、その量と大きさに相異が見られる。チベットはトルコ石、ブータンはサンゴにウエイトがおかれている。ブータンでは首飾りに用いられるのはサンゴのみ、しかも非常に大粒が目立つ。それに対しトルコ石は小さなものが他の装身具にあまり目立たない形で用いられている。このちがいはどこからくるのだろうか? 乾燥したチベットと湿潤なブータン、——気候の影響による価値感の相異もあるのだろうか。

5. ズィー (国王石) について

ズィーは、中国、ネパール(主として北部)、インド等に居住するチベット系の人々がつける石である。これによって民族を識別することができるほど独得の石であるが、ブータンではサンゴと共によく用いられており高価である。前述したように中西部のブータン人はチベット系の子孫と言われているから、その影響が残存しているのだろう。

このように表面上はズィーを多用しているブータン人であるが、よく調べていくとズィーについては皆ほとんど知らない。そしてくわしいことはチベット人に聞いてみなさいと言う。ズィーはその産地や工法などがよくわからない不思議な石で、それにまつわる伝説もたくさんある。例えば、パロ博物館々員のチベット系の女性によると、ズィーは主としてチベットとモンゴルの国境付近で産出する。しかし去年はこの博物館の付近を流れる川からも発見されたとのことだった。パロ博物館にもズィーがいくつか展示されていた。その中に長さ12cmもの長いズィーがあったので、驚いてたずねると、インドのカシミール製で偽物だとい

う。

また、首府のティンプーで装身具を扱う店の店主ロデンさんがズィーにくわしいというのでその話を聞いた。ロデンさんは18年前ラッサからやって来て、今48歳である。金の台にズィーをつけた指輪をしていた。これはズィー・ターソーマといって「馬の歯のズィー」という意味である。ズィーの模様がジグザグで馬の歯に似ているからだろう。これに似ているが、黒と白の模様のは、ズィー・タグロー（虎の模様の意味）といって、ダージリンでつくられる偽物だという。（ちなみに本物は半透明の茶褐色）

ズィーは、彼の話によると工場で作られるものではないし、店で売られているものでもない。天然のものであり、チベットの山や森から採れるという。チベットのどの地方からと聞くと、運がよければカム、アムド、ラサなどの地方からみつかるかも知れないという。（これまで何十人というチベット人に聞いた話でも、ズィーは天然に産出する石という点で一致していた。ただ、その産地は明解ではない。しかし私の調査によれば、ズィーの模様は人工的な化学処理を行なったものと思われ、その起源はメソポタミアであるらしい。それらの石が交易で運ばれるか、古い時代にその技法が伝えられ、遺跡から発見されるということは考えられる。）

ズィーの価格は目をあらわす模様（白い円）の数で決まることも話してくれた。たとえば、ミン・グーバ（目が9つ）は最も貴重で、最も少なく高価である。次いでミン・ガバ（目が5つ）、ミン・スンバ（目が3つ）の順になっている。目の数が2つのものは、最も価値が低い。

9が貴ばれるのは、ネパール、インドと全く同じで、ズィーの目玉の数に限らない。両国にはブローチや指輪など用いる宝石の数を9つにする「ノウゲリ」という装身具もある。古代インドの占星術に由来しているようだ。

ロデンさんは、ズィーにまつわる興味深い昔話をしてくれた。

「昔、チベットに一人の狩人がおりました。ある日、彼は狩に出かけました。夜、狩人は洞穴に

泊りました。暗くなったときに、彼は蜂のような生き物を見ました。突然、彼は恐しくなって、ズボンや靴を脱いで小さな生き物に被せました。次の日、見てみるとそれはズィーへ変わっていました。ズィーは神様から彼への贈り物だったのです。」

これまで聞いた話で、一番多かったのはこのロデンさんの話のように虫がズィーに変わったという説だった。とにかく、チベット人にとっては、ズィーは単なる石ころではなく、特別の精神的な意味がある。ところがブータン人の場合、身につけ、その価値は高く評価しているものの、チベット人ほど精神的要素は見られなかった。

6. 王室付銀細工師の村

首府ティンプーの北西、車で30分ほどの所に、皇太后おおかえの銀細工師の村 Dechenchholing があった。その村に通い、コマを作成する仕事ぶりをはじめから最後まで見せてもらい、その村の銀細工師のチーフ Namege Tsering さんの話を聞いた。彼は、年令51歳という、がっしりした体格の良い人だった。（身体的特徴からはネワール族とは考えられなかった。）「私は、31年前に皇太后の要請をうけて、この村にきました。現在、この村には銀細工師は150人ほどいます。（筆者注：人数が多すぎるような気もするので、これは家族を含めての数かも知れない）。私の父はダジョー（県知事や局長級の人の総称）でした。息子は5人いますが、2人はJunior Collegeに行っています。娘も4人。息子がこの仕事をつぐかどうかですって？さあ、どうでしょうねえ……この仕事は一般には世襲になっているんですけどね。」

ちなみに、金、銀細工師はゾンカでトゥルク Tulku と呼ばれ、鍛冶屋のカウGewより社会的地位は高いが、農民より低いらしい。

次にチーフと共に村の広場の材木に坐りこんで彫金をしている人たち、ひとりずつに名前や年齢やこの仕事をしている年数などを聞いたみた。（新しい作業場を隣りに建築中であった。）ここにいるのは全部で（チーフを除き）15人。全員がヤニ台を膝にかかえこんで、タガネで繊細な模様を彫り

出していた。銀の大きなカップ、剣、小箱、コマ、腕輪、仏像の巨大なイヤリングなど。素材はすべて銀。年齢は15歳から39歳までで、20代が9人と最も多かった。経験年数は短くて2年、長くて17年で、平均数年というところだった。3年位修業するとひと通りのことはできるようになるらしい。

私は、銀細工をつくる工程を見たかったので、ブータン女性の代表的な装身具であるコマをつくらせてもらうことにした。ブータンでは装身具は、注文生産で、材料も注文する人が調達して持っていくかなければならない。私にはその用意がなかったのでNamege Tseringさんが懐に持っていた銀貨を使わせてもらうことになった。英国王の彫像のついた古いインドの銀貨で、中には1906年のものもあった。はじめの話では、昼間は皇太后の仕事をしなければならず、夜しかつくれるので、完成まで少くとも数日はかかるということであった。滞在日数が限られているので何とかもう少し早くやらせてもらえないかと頼むと、Namegeさんは村長らしき人に相談して昼間も製作してよいとの許可を得てくれた。

代金はすべて重量に比例して決まってくるとのこと。コマ1セット(キラという布を両肩で止めるため2つ必要)をつくるためには、5トラの銀が必要である。銀貨1枚が1トラ(11,664g)で、30ニュートラム(ルピー)だから、その5倍で150ルピーが材料費。工賃は1トラが20ルピーで、全体で100ルピー、両方合計すると250ルピーとなる。金粉で金メッキすると、メッキ代250ルピー。最終的な値段は500ルピー、日本円にして約12,500円なりであった。

結局コマが完成するまで3日かかった。その製作にたずさわったのは計3人。1人はコインをとかし、銀板をつくって、ヤニ台につけるまで、すなわち地金づくりはクンツォー・ツェリンさん(41歳)、ついで模様を打ち出して彫るのがウォンチュー(18歳)青年——この人は顔つき身体的特徴からネワール系ではないかと思われた。最後のメッキの工程は金消しという古くからある技法であったが、これもまた別の小屋で別の男性が担当した。このことから推量して、ある程度の分業が行

なわれていることが判明した。

燃料は木炭で手廻しフィゴを用いる。地金からつくる古いメッキ法など、技法から見ると、日本などより古い型式が残存しているといえよう。これはネパールとも共通である。

Mehraによれば、特に17世紀以後、有名なネパールの工芸家がティンブーやプナカの谷に仕事をしにやって来たという記述が歴史書にくり返しあらわれるという。そのうちのある者がチベットのラサと同様、ブータンにも定着した。今日、金銀細工師の村として、Dranang(ThinchuとPachuの合流点chuは水から転じて川の意)村とBelnang村(ティンブー谷)があるが、後者はその名称からして(Balpa=Nepal)明らかにネパール人起源であろうと述べている。

Dechenchholing村その他ブータン国内における筆者の調査では、ネパール人と現在の金銀細工師との関係は不明であった。再度調査してみたい。

7. むすび

ブータンの装身具を考えるうえで、服装との関係をぬきにしては語れない。ブータン独自の装身具としてのコマは、これがなければブータン女性の服装が成立しないほど、実用的な用途を兼ねそなえたものでもある。ちょうど着物に対する帯のように……。このコマは何十年か前まではティンカップという大型のピンであったという。ティンカップは現在も商店の片隅でこっとう品として売られており、実物を入手できる。金製の直径5～6cmの環に10cm以上のピンがついたものである。

これと類似の形態のものは、チュニジアのトウアレグ族の女性が着用していたり、古くはシリアのバルミラの遺跡にも見られる。またギリシア時代のドーリア式キトンも、長方形の布を、肩ピンで前後をとめて着用していたというから、ティンカップとまったく同じ機能といえる。

地理的に遠く離れた土地に同じ形態のものが存在することは興味深いが、これらは関連があるのではなく、自然発生的なものではないかと思われる。東南アジアやインドなど気候の暑い所は腰巻

のように下半身を一枚の布でおおうという衣類から発達して現在のような形態になったというが、ブータンではそれでは気候的に寒すぎるので、肩までおおうようなキラという布（三枚を縫い合せて一枚のようにしている）になったのではないだろうか。ギリシャ、ローマのようなドレープが発達しなかったのは、素材がドレープのできにくい野蚕から織った絹や厚手のしっかりした木綿だったためであろう。ブータンのキラは布を身体に巻くといってもインドのサリーとちがって身体の線をまったく出さず、和服のように直線的に着こなす。ここに美に対する何らかの価値感の相違が反映されているのかも知れない。

ブータンでは、装身具はインド・ネパールのように通過儀礼との結びつき、呪術性財産性といった性格を強く持っていない。階級とも権威とも結びついていない。装身具は貧富の差が少なく、豊かで平和な農業国ブータンを正に象徴しているようだ。ブータンの例に見られるように装身具と服

装は人間の生活の重要な部分を構成している。それらは自然、経済、政治、宗教などの影響を受けており、一口には解明できないほど複雑な要素がからみ合っている。しかし、だからこそ、興味深いとも言える。今後も装身具を通じての文化の特性及び、国をこえての文化の流れなどを追及していきたい。

参考文献

Mehra, G.N.(1974): Bhutan, Vikas Publishing House Pvt Ltd, Delhi

石井 博(1984): 照葉樹林文化『民族学研究』49-3

西岡京治・里子(1978): 『神秘の王国』学習研究社

深作光貞・相川佳予子(1983): 『続衣の文化人類学』

PHP研究所

P. G. ボガトウイリョフ (松枝到, 中沢新一訳)

(1981): 『衣裳のフォークロア』せりか書房

(11回生)

Regional Characteristics of Bhutan in Terms of Ornaments

Kiyomi KOGO